埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

戦時期メディアの編成と展開：文藝春秋社発行『現地報告』総目次 (下)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-07-26 キーワード (Ja): キーワード (En): during wartime, media, genchi hokoku, bungeishunjyu 作成者: 掛野, 剛史 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/540

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

戦時期メディアの編成と展開

―文藝春秋社発行『現地報告』総目次（下）―

掛野剛史

本稿は「戦時期メディアの編成と展開―文藝春秋社発行『現地報告』総目次（上）―」（『埼玉学園大学紀要　人間学部篇』一〇号、二〇一〇年一二月）の続篇である。雑誌の概要、発行巻号、発行編輯人の一覧および三一号までの総目次とその凡例は、そちらに掲載しているので併せてご参照頂きたい。

『文藝春秋七十年史』（文藝春秋、一九九一）は、『現地報告』の創刊号にあたる臨時増刊号（「日支の全面激突」）について、「『文藝春秋』と『話』の両特色を活かして編集されている」と評しながら、その編輯後記について「いま読むと、正直にいって驚きを禁じえない」とし、原文を引用した後で「この踊ったような文字は、それまでの文藝春秋社の伝統にありえないような、積極果敢さの表明である。中正、あくまで自由な立場に立たねばならないものが、まず異常に興奮しているようである。（略）この後記には、これが『文藝春秋』かの想いがある」と記している。正史としての文藝春秋史からは、『現地報告』は一種の異常時の産物として位置づけられているわけである。

こうした『現地報告』の位置付けに本稿は積極的に異を唱えるものではないが、戦時期の出版メディアについて、その資料自体の不足はやむを得ないものとしても、現存し見ることのできる資料についても、研究の基礎データが乏しいことを稿者は常に感じていた。戦時下にある雑誌が何年何月まで発行され、誰の何という文章が掲載されているか、容易に知ることができないことが多いというのは、稿者自身の管見を割り引いたとしても、現状認識としてある程度妥当性をもつと思われる。

以前、『現地報告』掲載の小林秀雄「三つの放送」（52（以下『現地報告』号数を記す））の「発見」が話題になったように、『現地報告』は存在こそ知られていたが、その内容について省みられることはほとんどなかった。本稿はそうした現状に対し、いささかなりとも一石を投じるべく、通覧できる総目次を作成したものである。それに加えて以下、内容について紙幅の許す限り紹介、解説を行い、その輪郭の素描を試みたい。

『現地報告』の特徴は、タイトルでもある「現地」の「報告」にあり、当然ながら特に中国関連は多い。盧溝橋事件を受けて創刊さ

れた第一号では、特派員として派遣され、七月二四日に天津入りした編集者の下島連の現地報告「戦乱の天津から」が掲載された他、末尾に（放送筆記）とはあるが、事件途中に駐屯軍司令官になった香月清司の「陣中より」、当時天津から大連青島を視察旅行していた小谷節夫の「在留日本人は斯く叫ぶ」などが現地の状況をいち早く伝える報告として興味深い。以後も事変の展開とともに、緊迫した戦局を報告、通信といった形で掲載し内地へ届けた。また戦況が長期化すると、戦地だけではなく、銃後の生産問題や生活実態なども同様にルポ形式などで報告されていく。題名だけ拾っていくと「東北六県の人と産業」（11）、「時局下に進む生産力拡充の巨歩」（19）、「国民生活現状報告」（21）、「帰還兵工場地帯を歩く」（31）、「工場へ娯楽を持ちこむ」（40）、「戦ふ農村の姿」（65）などがある。これは海軍の後援によって昭和一四年六月に創刊された『大洋』が、誌名通り北洋南洋の海を巡る話題に集中していることと対照をなす特徴といえるかもしれない。

こうした報告をはじめとして、誌面には文藝春秋の編集者が署名入りで書いた記事が目立つ。名前を挙げると、下島連（1、2、33、54）、小坂英一（3、17）、柳澤彦三郎（3、4、34、59）、池島信平（20～22、45、53）、鷲尾洋三（23、27、29、34）、立上秀二（23、24、28）、小田桐孫一（30、31）、澤村三木男（32、41、49）、生江健次（33、53）、夏目伸六（33）、牧野義男（50、51、53、60）、小山内徹（65）、江原謙三（67）徳田雅彦（67）、柴野方彦（67）がおり、それぞれに記事を執筆したり、座談会に参加したりしている。鷲尾洋三や夏目伸六の場合は、徴兵されて従軍したケースだが、編集者である彼らが現場の第一線に出た見聞はその後の誌面作りにも生かされているだろうし、後に合併する『話』の編集方法と親和性が高い。表紙写真も編集者が撮影したものが使われている（6、7、16、17、23、28）。

編集者の現地報告と同様に目立つのが、作家の従軍記、また従軍体験のある作家の執筆である。文藝春秋が派遣した岸田国士（6）もいるが、五五号からは軍による従軍作家の文章が頻出する。いくつかの名前を挙げると、倉島竹二郎（56）、高見順（57）、小田嶽夫（57）、柴田賢次郎（57）、大林清（58）、桜田常久（58）、浅野晃（64）、榊山潤（64）、寺崎浩（65）などが軍報道班員の肩書きで執筆しており、棟田博（30、40）、上田広（27、30、32、36、41）、日比野士朗（20、23、27、29、30、36、39、46）、火野葦平（27、31、35、37）、里村欣三（31、34、67）、和田伝（16、33）などの名前も目立つ。

これ以外の文学関係について、登場回数の多い名前と掲載号数のみ記すと、久米正雄（3、4、23、30）、佐佐木信綱（3、21、42）、佐藤春夫（3、9、10、11、15、25）、小林秀雄（8、21、52）、今日出海（8、11、17、30、42）、林房雄（8、10、11、26）佐藤俊子（10、23、47）、富安風生（20、24、45）、上司小剣（21、36、39）、坪田譲治（24、25、28、32）、長谷健（36、38、45）が三度以上登場している。

なお昭和一三年三月の内務省警保局情報局による執筆禁止者リストの中で、その名が明示されていたとされる宮本百合子（41）の登場が目を惹く。「社会随想」として「今日の耳目」と題した随筆を書いているが、いつも通る横丁で「祝出征」の旗と、「名誉戦死者」の立札が並んでいる中を通行人が「何とも云へない心持の眼のなかに往来してゐる」光景を描く。事変下においてかなりきわどい内容

（二）

の随筆であり、単に時局迎合雑誌として済まし得ない、『現地報告』の多様な局面をはからずも浮上させている。

ただ誌面上の言説を注意深く見定めると、日米開戦以後、誌面は一つの方向へと歩みを進めていくことがわかる。その明確な現れが五五号の日本世紀社同人「翼賛選挙の真諦」の掲載であろう。日本世紀社は、後の大日本言論報国会の中核メンバーになる人物たちによる翼賛的言動で名高く、『中央公論』編集部長だった畑中繁雄の回想『覚書・昭和出版弾圧小史』（図書新聞、一九六五）で「ファシスト評論家グループ」と名指しされる一群である。

この号あたりから日本世紀社関係の執筆者が増えていく。特に同人の齋藤晌、西谷弥兵衛、花見達二、井澤弘といった人物たちの執筆が目立つようになる。編輯後記にも「本号より、斎藤晌、西谷弥兵衛、花見達二の諸氏により、思想、経済、政治についての建設的時評を続けること、した。何れも、革新的情熱を抱き、評論界に活躍する人々である。これは相当に高いところに標準を置き、大東亜建設に資せんとの意図に出づるものである」（54）との宣言があり、彼らの時評が六二号まで毎号掲載される。

時を同じくして五四号より「時務言」という巻頭コラム欄が設置され、時事を論じる。無署名だが末尾に（柳澤生）とあり、編集者の柳澤彦三郎の手によると知れる。「編輯後記」には「建設期に於ける本誌の責任は、更に加重される。我々はその責任を深く反省して、本誌の編輯に常に検討を加へ、聖業に参ずる日本国民に方向を示唆し、誤れる米、英的なるものの根底的破摧を念願して邁進せねばならぬ。☆この秋、本誌編輯部はその構成を新にして出発することになつた。☆編輯部員各自、日本の直面する時局の深刻なる意義の究明をなし、自らの錬成を怠らず、本誌を一層充実せんと努力を誓ふものである。（略）元来、雑誌は愛読者と編輯者とが一体となつてこそ、その意義を果すものである。」と記され、改行して目立つ形で「編輯者の独善は厳格に戒められねばならぬ」と続いている。これまでの編集体制、方針に対する批判が込められ、それを一新した宣言であることは間違いない。この号から編輯後記には編集者の名前が載るが、新体制メンバーは、柳澤以下、牧野義男、柴野方彦、徳田雅彦であり、六四号からは柳澤、牧野の名前が消え、江原謙三、鷲尾洋三が加わる。六五号は江原謙三の名前のみが載り、六六号からは無記名になる。奥付記載の編集発行人は五七号までは池島信平だが、先の五四号辺りから彼は実質的な編集からは離れていったのだろう。五八号からは発行人が斎藤龍太郎、編集人が柳澤彦三郎になる。

この動きは文藝春秋社内部の動静とも関連するところでもある。昭和一八年四月に文藝春秋社の役員改選が行われ、専務取締役だった佐佐木茂索が副社長となっている。これを『文藝春秋七十年史』は「栄転などではなく社内新体制のもと、現役を退くことを意味していた」と、一種の失脚であることを示唆し、「社内を〝小東條〟ともいえる神がかり的跳ね上がり編集者が、肩で風を切って歩いていた」と記す。佐佐木に変わって専務取締役に就任したのが斎藤龍太郎である。斎藤龍太郎と柳澤彦三郎は、文藝春秋社内でも積極的に時局に関わり、齋藤は大日本言論報国会の評議員、柳澤は事務局企画課長に就任し、戦時下の出版用紙を統制した日本出版文化協会にも参画した。前述の日本世紀社関係者と、斎藤龍太郎、柳澤彦三郎、下島連といった文藝春秋社内のメンバーが時局下の社内でのヘゲモ

ニーを握り、その進路に影響力を持ったものと推測される。『現地報告』誌面にはその様が直接的に現われたのだろう。

池島信平が『現地報告』の編集を離れたことは社内の力関係の変化を象徴していると考えられるわけだが、その契機となる事件があったという。池島の『雑誌記者』（中央公論社、一九五八）によれば、五一号の蠟山政道の論文が原因で、当該号が「発売禁止」となったことだという。『文藝春秋七十年史』も同様に記すが、『出版警察資料』によれば、蠟山政道の論文ではなく、座談会「引揚邦人の語るアメリカ戦時態勢」中の四四頁の笠井重治の発言が対象であり、「発売禁止」ではなく、安寧秩序違反による削除処分である。しかも四万二千部発行のうち、差押部数五五四三部で、市中に出回ったほとんどは削除されていない。なお『出版警察資料』の中から、『現地報告』の処分を抜き出すと、三五、六三の二号が処分対象となっており、それぞれ一四三、一四六頁、四九～五八頁が削除処分を受けている。五一号と同じく、三五号も発行五万部のうち差押部数五〇三二部なので、ほとんどは処分されておらず、実際に架蔵本、国会図書館所蔵本、日本近代文学館所蔵本いずれも削除処分はされていない。六三号も同様だが、前記のように六四号から編集者の変更があるのは、それに関連してのことかもしれない。逆に四六号は『出版警察資料』に記載がないが、扉に「改訂」の印が押され、四五～五一頁が切取処置されている。

頁数は、一四号から二五六頁で定着しており、合併した三二号だけ三〇四頁と増えたものの、その後下降の一途を辿り、四九号からは大幅減の一四四頁となる。六五号に至ってはついに九六頁となり、六七号で廃刊となる。最終号にその予告は一切なく、わずかに菊池寛が『文藝春秋』の「話の屑籠」（昭和一八年五月）で「来月あたりから」本誌に合併すると述べ、翌月「合併した」と報告するのみであった。これは、昭和一五年三月、『話』を改題して存続させる方法を採った時も同様で、合併前の『現地報告』『話』には、その旨の告知が全くされていない。菊池寛が「話の塵」（32）で「時局的に」『現地報告』の方が「やり甲斐」があるとして事後的に報告を行ったのみである（『オール読物』（昭和一五年六月）の「編輯後記」にも事後報告がある）。『話』には松坂忠則「女軍医」という作品が連載されており、読者投稿も受け付けていたが、それらはうやむやになったようで、当時文藝春秋社発行の『オール読物』『大洋』『文学界』、関連する『モダン日本』などに継続しての掲載はされていない。

当時の読者がこの事態にどんな反応を示したのか。稿者は把握できていないが、二八号には「愛読者カード」を挟み込んで「本誌への御忠告」を募り、五四、五五号、六二号と読者投稿を呼びかけ、それが「誌上協力会議」として掲載されるなど、編集側は読者の組織化を図っていた。にも関わらず、何の予告もないまま突然廃刊した『現地報告』という雑誌は、創刊から合併統合、廃刊まですべて時局に関連した、この時期に典型的な雑誌メディアではある。だが、戦時下の「特異」な雑誌としてではなく、類似した改造社の『大陸』、第一書房の『北支』といった雑誌と併せた形で、その誌面内容の検討が今後必要になるだろう。

〔付記〕本研究は科研費（課題番号23720114）の助成を受けたものである。

（四）

『現地報告』三二　八巻六号　一九四〇年五月一〇日発行
表紙写真　渡邊勉撮影　3
扉絵　熊岡美彦　3
法律に現れたる支那国民性　瀧川政次郎
支那時局に直面して　神田正雄
阿部大使に期待するもの　田中幸利
大陸画文集　万年床　佐々貴義雄
現地報告　40 39 30 20 4
紛糾せる欧洲戦局　41 39 38 29 19
北欧電撃作戦への疑問　池崎忠孝　42
北欧戦火の経済的考察　小島精一　50
大陸画文集　熱河の山　三宅凰白　49
話の塵　菊池寛　61 60
紛糾せる欧洲戦局　61 60 59
蘭印を繞る列国と日本　山田文雄　62
『激化せる欧洲戦局と極東』座談会　68
（秋山邦雄／市河彦太郎／鹿島守之助／河野恒吉／関根郡平／船田中）
銃眼　98
科学動員計画　友田宜孝　73
新京放送余談　大宅壮一　73
孰れが勝つか　徳田秋声　77
個人道徳の防衛　片岡鉄兵　81
大陸画文集　姑娘　樋口富麻呂　85
新国民政府中堅層の人と思想　中谷武世（在上海）　99
大陸画文集　甘露寺の眺望台　五味清吉　100
新政府の当面する経済問題　根津知好　105
支那生活縦横談　農学博士　吉田新七郎　106
大陸画文集　商邱城外にて　和田香苗　112
北欧の想ひ出　125
氷雪の国々　土岐善麿　125
北欧の悒愁　市河晴子　130
紛糾せる欧洲戦局　133
使命の失敗（前駐独英大使　サー・ネビル・ヘンダーソン）　134
銭塘江従軍の手帳（第二次浙東作戦）　朱美保　139
大陸画文集　廬山大天池　佐々貴義雄（在上海）　140
北支点描（＊絵と文）　山下謙一　147
紛糾せる欧洲戦局　152 147
航空機対軍艦の戦闘　146
日本留学の蘭印学生座談会　159
（パソリー／ヅマリ／トラスノ／増田四郎）
銃後建設面報告書　脈動する北陸地方　最上徳平　166
大陸画文集　北京西郊碧雲寺附近　三宅凰白　177
銃後建設面報告書　177
四国地方を往く　田中裕一　176
「東北」の新しい出発　鶴峯仁吉　185
大陸画文集　支那饂飩の屋台店　樋口富麻呂　178
銃後建設面報告書　東海農村の種々相　村越三平（在泰天）　186
満洲農業小見　青木実　195
東西漫画合戦（＊漫画）構成　加藤悦郎／岸丈夫　194
大陸画文集　195
蘆溝橋　203
開封中山門を守る　和田香苗　209
時代の子供　坪田譲治　217
『現地報告』三二　八巻六号　一九四〇年五月一〇日発行
表紙写真　渡邊勉撮影　3
扉絵　熊岡美彦　3
法律に現れたる支那国民性　瀧川政次郎
支那時局に直面して　神田正雄
阿部大使に期待するもの　田中幸利
大陸画文集　万年床　佐々貴義雄
現地報告　40 39 30 20 4
紛糾せる欧洲戦局　41 39 38 29 19
北欧電撃作戦への疑問　池崎忠孝　42
北欧戦火の経済的考察　小島精一　50
大陸画文集　熱河の山　三宅凰白　49
話の塵　菊池寛　61 60
紛糾せる欧洲戦局　61 60 59
蘭印を繞る列国と日本　山田文雄　62
『激化せる欧洲戦局と極東』座談会　68
（秋山邦雄／市河彦太郎／鹿島守之助／河野恒吉／関根郡平／船田中）
銃眼　98
科学動員計画　友田宜孝　73
新京放送余談　大宅壮一　73
孰れが勝つか　徳田秋声　77
個人道徳の防衛　片岡鉄兵　81
大陸画文集　姑娘　樋口富麻呂　85
新国民政府中堅層の人と思想　中谷武世（在上海）　99
大陸画文集　甘露寺の眺望台　五味清吉　100
新政府の当面する経済問題　根津知好　105
支那生活縦横談　農学博士　吉田新七郎　106
大陸画文集　商邱城外にて　和田香苗　112
北欧の想ひ出　125
氷雪の国々　土岐善麿　125
北欧の悒愁　市河晴子　130
紛糾せる欧洲戦局　133
使命の失敗（前駐独英大使　サー・ネビル・ヘンダーソン）　134
銭塘江従軍の手帳（第二次浙東作戦）　朱美保　139
大陸画文集　廬山大天池　佐々貴義雄（在上海）　140
北支点描（＊絵と文）　山下謙一　147
紛糾せる欧洲戦局　152 147
航空機対軍艦の戦闘　146
日本留学の蘭印学生座談会　159
（パソリー／ヅマリ／トラスノ／増田四郎）
銃後建設面報告書　脈動する北陸地方　最上徳平　166
大陸画文集　北京西郊碧雲寺附近　三宅凰白　177
銃後建設面報告書　177
四国地方を往く　田中裕一　176
「東北」の新しい出発　鶴峯仁吉　185
大陸画文集　支那饂飩の屋台店　樋口富麻呂　178
銃後建設面報告書　東海農村の種々相　村越三平（在泰天）　186
満洲農業小見　青木実　195
東西漫画合戦（＊漫画）構成　加藤悦郎／岸丈夫　194
大陸画文集　195
蘆溝橋　203
開封中山門を守る　和田香苗　209
時代の子供　坪田譲治　217
前線の手記　島崎曙海　242
続・宣撫班戦記　ソ連北方囚人収容所の戦慄　V・N・キッセレフ　228
前線の手記　北村三郎　146
花について―りんふん戦話集のうち　上田広／無縁寺心澄画　140
新鋭重爆機に搭乗するの記　田中佐一郎　136
前線の手記　124
南潯線―南昌攻略戦の序　澤村三木男　260
春の戦闘記―歌人軍医の前線日記　中村春台子　248
全蒙古統一の一歩前―成吉斯汗全伝・三　大場弥平／鈴木朱雀画　272 262
編輯後記　304 288
『現地報告』三三　八巻七号　一九四〇年六月一〇日発行
表紙写真（珠江）　南支派遣軍報道部撮影　3
扉絵　佐々貴義雄画　3
新政府樹立直後の政治情勢　今中次麿　4
法幣の不安と円域　杉村広蔵（在上海）　12
上海租界の敵性　石浜知行　17
大陸画文集　深庄　田中佐一郎　11
時局直言　25 18
利潤統制の目指す最高目的　栗本勇之助　24
現地報告　政界現地報告　木原通雄　26
米国の参戦問題―直ちに実現せぬと考へる理由　清澤洌　28
大陸画文集　黄土の街　真垣武勝　31
戦局の全面激化と伊太利の態度　関根郡平　32
開戦前後の仏国事情　澄川道男　41
英戦時内閣を視る　伊東敬　40
現地報告　50 31
新聞現地報告（国内）　津久井龍雄　48
新聞現地報告（大陸）　太田宇之助　42
蘭印の日本人たち　岡野繁蔵　41
大陸画文集　予後歓談　野間仁根　40
瑞西の立場と国民性　佐藤醇造　60
蘭印問題の本質　立野儀光　59
『断乎！食糧配給機構を確立すべし』座談会　58
（奥谷松治／川村和嘉治／崎村茂樹／水川潔／八木澤善次）
銃眼　72
急降下爆撃　宮城音五郎　68
生産と利得　永田清　66
農村上層部の前進　和田伝　65
親爺教育　桐原葆見　60
現地報告　59
財界現地報告（関東）　58
財界現地報告（関西）　松本榮　87
インフレ上海通貨異変―銅・紙・あるみ　本山住吉　83
北支の物資物価　小宮義孝（在上海）　79
ノーマン・D・ハンウエル／カート・ブロツク　75
上海のアメリカ人そのほか　谷川徹三　75
国民政府青年要人現地座談会　98
（周化人／姜佐宜／譚覚真／楊湧烈／郭秀峯／鍾任寿／村上剛／庄子勇之助／藤澤剛一）
『現地報告』三三　八巻七号　一九四〇年六月一〇日発行
表紙写真（珠江）　南支派遣軍報道部撮影　3
扉絵　佐々貴義雄画　3
新政府樹立直後の政治情勢　今中次麿　4
法幣の不安と円域　杉村広蔵（在上海）　12
上海租界の敵性　石浜知行　17
大陸画文集　深庄　田中佐一郎　11
時局直言　25 18
利潤統制の目指す最高目的　栗本勇之助　24
現地報告　政界現地報告　木原通雄　26
米国の参戦問題―直ちに実現せぬと考へる理由　清澤洌　28
大陸画文集　黄土の街　真垣武勝　31
戦局の全面激化と伊太利の態度　関根郡平　32
開戦前後の仏国事情　澄川道男　41
英戦時内閣を視る　伊東敬　40
現地報告　50 31
新聞現地報告（国内）　津久井龍雄　48
新聞現地報告（大陸）　太田宇之助　42
蘭印の日本人たち　岡野繁蔵　41
大陸画文集　予後歓談　野間仁根　40
瑞西の立場と国民性　佐藤醇造　60
蘭印問題の本質　立野儀光　59
『断乎！食糧配給機構を確立すべし』座談会　58
（奥谷松治／川村和嘉治／崎村茂樹／水川潔／八木澤善次）
銃眼　72
急降下爆撃　宮城音五郎　68
生産と利得　永田清　66
農村上層部の前進　和田伝　65
親爺教育　桐原葆見　60
現地報告　59
財界現地報告（関東）　58
財界現地報告（関西）　松本榮　87
インフレ上海通貨異変―銅・紙・あるみ　本山住吉　83
北支の物資物価　小宮義孝（在上海）　79
ノーマン・D・ハンウエル／カート・ブロツク　75
上海のアメリカ人そのほか　谷川徹三　75
国民政府青年要人現地座談会　98
（周化人／姜佐宜／譚覚真／楊湧烈／郭秀峯／鍾任寿／村上剛／庄子勇之助／藤澤剛一）
黒海の通商路　カール・ハインツ・プールペル　124
産業報国運動の進展　北村三郎　140
現地報告　文化の現地報告　樺俊雄　136
大陸画文集　修水河を渡つて　田中佐一郎　146
戦時下食糧生産地帯の踏査報告　147
農業経営共同化の胎動―岡山県下の調査報告（本誌記者）　下島連　148
米産県踏査記　生江健次（本誌記者）　158
興亜奉公日の感想　166
世相の裏表て　157
断想　石原純　147
西部戦線の地形　辰野隆　146
大陸画文集　水季遺難　ダグラス・ジョーンスン　144
支那事変最近の戦局概観　真垣武勝　139
（陸軍省情報部陸軍歩兵少佐）
大陸画文集　通信　勝屋福茂　147
戦術的に観た落下傘部隊　野間仁根（陸軍省航空兵少佐）　146
東西漫画合戦（＊漫画）構成　西原勝　140
詩人黄瀛のこと　岸丈夫／加藤悦郎　136
東部満ソ国境を往く　奥野信太郎　124
想ひ出の戦線　井本長谷親　146
不精な兵隊　夏目伸六　140
行軍　浦岡偉太郎　136
全蒙古統一の覇業成る―成吉斯汗全伝・四　大場弥平／鈴木朱雀画　124
編輯後記　256 240
『現地報告』三四　八巻八号　一九四〇年七月一〇日発行
扉絵　野間仁根　3
英仏自由主義没落の教訓　金子鷹之助　4
大陸画文集　診療車　宮田重雄　15
フランスの屈服と其後に来るもの　関根郡平　14
独逸から何を学ぶべきか　16
独逸国防軍の戦争目的　26
ナチ総動員体制と社会組織　32
独逸国民訓練の齎らすもの　39
大陸画文集　通州瓢箪池　31
輿論調査　介入か不介入か？　24
時局直言　15
新党の基本問題　14
現地報告　3
ドイツの制覇と不介入政策―政界　木原通雄　67
仏印の敵性を衝く　津久井龍雄　60
宜昌占領と仏印遮断の影響　（陸軍省情報部）　西原龍夫　58
切符制度について―世態随感　（陸軍砲兵少佐）　太田宇之助　52
東洋ルネッサンス運動―日支文化提携具体策（二）　青野季吉　51
豊島与志雄　80
上海と第三国勢力　杉村広蔵（在上海）　72
『世界の変局に際し同胞に愬ふ』座談会　68
（末次信正／建川美次／中野正剛／橋本欣五郎／松本徳明／来間恭）
96　90 86
118　94 89　84 78 71　67　66 59 57 51 50 43 39 31　24 15 14 3　256 255　239 223　211 205 197 189 187 186　181 180 173 171　166 157　147 146 144 139 134

銃眼　船山信一
新聞短評　荒川秀俊
旱魃　丸山幹治
官僚タイの風物詩　宮原武雄　120 109 105 101
躍進タイの風物詩
現地報告
新聞編輯上の直接法・間接法―国内の新聞　津久井龍雄　太田宇之助　松本忠雄　130 129 128
重慶断末魔の呻き―大陸の新聞
見限られた英国―香港印象記
現地報告　松本榮　134 129 128
鉄鋼価格の問題　本山住吉　138 137 136
三ツの日本一事件―関西の財界　澤田謙　143 137 136
仏領印度支那を視る
農村は何を考へてゐるか
過渡期に立つ農村―群馬県農村の輿論調査　本誌記者　鷲尾洋三　146
土の如く沈黙する農民達―千葉県木郷地方の農民調査報告　本誌記者　柳澤彦三郎　152
現地報告
勤労青年は希求する　科学の勝利―文化　樺俊雄　桐原葆見　166 163 154
北支鉄路建設の苦心を語る座談会　伊藤太郎／竹森俊男／安増一雄／境米市／石橋信嫁／城所英一／板屋猛／辻茂樹／永田久次郎／江口晨秀／高橋定一／寺坂亮一／45名　172 163 162
決死隊諸勇士の覚悟と遺書
大陸画文集　張家口にて　宮田重雄　206 205 191
小学教師の手記
教育者の政治的無力性　小助川昨三　206 192 174
教育と教育者　今井誉次郎　益子善六　224 218 211 208
南寧行（＊絵と文）　里村欣三／生澤朗画　239 223 217 211
怪我の功名
蒙軍の北支那殺到―成吉斯汗伝第五　大場弥平／鈴木朱雀画　256 255 240
大陸画文集　北京の歩哨　川嶋理一郎　256 255 254
編輯後記

『現地報告』三五　八巻九号　一九四〇年八月一〇日発行
表紙　大佛次郎氏撮影
扉絵　川島理一郎画　3
全体主義の勝利と欧洲新秩序　野村重臣　4
近衛内閣と新体制　英米依存外交の敗退　井澤弘　15
ソ連の南下政策　遠藤一郎　23
近衛内閣と新体制　24 16
『新政治体制の確立を要請す』座談会　32
銃眼　河野密／永田清／本領信治郎／三木清　34
新政治体制と国民教育　城戸幡太郎　39
祖国への希望　林髞　43
新体制への希望　松前重義　47
大陸画文集　童心　酒井亮吉　59
近衛内閣と新体制　59
新体制の中心としての近衛公　47
挙国新体制と既成政党　津久井龍雄　43
妙法寺三郎　39

大陸画文集　観劇の人　伊藤正徳　70 69
欧亜情勢の急転と米国の焦燥　原精一　78
近衛内閣と新体制　丸山幹治　21名　84
輿論調査　新体制へのプラン　88
新体制下の官僚
時局直言
近衛内閣と新体制　小島精一　90
転換期に於ける大陸経済の諸問題　酒井亮吉　97
大陸画文集　止つた自動車隊
近衛内閣と新体制　97 96
東亜経済圏の確立へ　根津知好　98
世界新情勢と東亜生活圏の問題　山崎靖純　102
現地報告　松本榮　105 101
教壇学徒の時局報国―関東の財界　本山住吉　107 106
七・七旋風―関西の財界
近衛内閣と新体制　107 106
東亜経済ブロックの展望　伊藤好道　108
現地報告　政界転換の序幕―政界　木原通雄　111 108
この頃の上海　小岩井浄　112 111 110
近衛内閣と新体制　在上海
『新体制に処する関西財界人』座談会　大島堅造／小畑源之助／春日弘／栗本勇之助／田島正雄／岩井良太郎　118
現地報告
新体制と新聞―国内の新聞　津久井龍雄　田中幸利　141 140
豪語する蔣介石―大陸の新聞　141 140
近衛内閣と新体制　139
世界新秩序と日本新秩序
近衛公に献言した人々　清水芳太郎　大森新太郎　142
現地報告　文化の再編成　樺俊雄　156 150 142
日支文化提携の根本政策―日支文化提携具体策　156 155 149
山坂街―「兵隊の地図」のための長たらしい序文　加田哲二　158
欧洲現地報告　火野葦平　163
独逸戦時風景　本社従軍記者　173
英仏敗戦をみて
『金』の悲劇　木村禧八郎　164
穆時英君のこと　森元治郎　174
幻談鬼語　気賀健三　180
ダンケルクの悲劇―独逸軍情報部隊従軍記　奥野信太郎訳／高明　186
奥野信太郎　187 180
大陸画文集　寝てゐる兵　ジョン・フイツシヤー　195 186
奢侈品随想―世相談義　原精一　196
北支大平原の殲滅作戦―成吉思汗伝第六　帶刀貞代　202
大場弥平／鈴木朱雀画　210
編輯後記

『現地報告』三六　八巻一〇号　一九四〇年九月一〇日発行
扉絵　原精一　3
世界の情勢と日本の決意　清瀬一郎　4
大陸画文集　支那の動向　鳥海青児　13
世界経済新秩序の動向　金原賢之助　14
新体制への実践　新政治体制試案　河野密　24

扉絵　240 239
大陸画文集　223 217 216
編輯後記　240 224

『新経済体制』の相貌と其重点　高橋亀吉　32
時局直言
新体制への実践　吉岡金市　40
農村新体制試案　武村忠雄　42
新経済体制試案　50
「新政治体制の発足」座談会　赤松克麿／清瀬一郎／小山亮／末次信正／肥田琢司／濱田尚友　60
銃眼
情報局設置　阿部賢一　63
サラリーマンと新体制　野崎龍七　67
現地報告　新体制への発足―政界　木原通雄　81
新体制への実践　準備会に動く人々　末河隆五郎　82
昨今統制団体秘聞―重工業の巻　由比佐介　88
現地報告　松本榮　95
新体制待ちの心理―関東の財界　本山住吉　96
財界人天昇り―関西の財界　97
政治と学生―新体制下の学生　樺俊雄　98
英本土の大空襲と海上封鎖の見透し　大場弥平　104
米国は日本を牽制出来るか　ジョン・ガンサー　106
現地報告　114
朝日新聞の新体制―国内の新聞　津久井龍雄　113
新体制への実践　支那側デマの種々相―大陸の新聞　田中幸利　119
現地新体制確立の急務　在上海　杉村広蔵　120
現地報告　文政の刷新―文化　樺俊雄　121
日支文化提携の基礎條件―日支文化協力と支那的性格　129 122
新体制への実践　長谷川如是閑　130
「新体制に農民は要求する」座談会　川瀬新蔵／池田徳三郎／市島関太郎／後藤清一／鈴木久太郎／林文治　136
開拓地の小学校―満洲紀行　その一　本社特派員　長谷健　150
房総の避暑地を往く　上田広　135
朝鮮文化通信　金史良　129 128
社会随想　上司小剣　121 120
隣り組巷談　杉山平助　114 106 98 97 96
現代と不良児　鳥海青児　119 113 104 97 96
大陸画文集　髭の勇士　日比野士朗　95 87 81 67 63
小宅の戦ひ　208 192 191 186 182
編輯後記　174 164 152

『現地報告』三七　八巻一一号　一九四〇年一〇月一〇日発行
表紙（英国沿岸防備兵）　鳥海青児　3
扉絵　208 207 191 190 186
経済活動の新しい意義　本位田祥男　4
現地報告　10 3
外交転換後に来るもの（政界）　木原通雄　11
新体制の基本理念　神谷茂　11
新体制の中間報告　24 11
新体制の推移を観る　津久井龍雄　26
経済団体と新体制　岩崎英恭　31
新体制下のジャーナリスト　清水幾太郎　38
新体制の中間報告　32
軍部と新体制顛末　40
赤江田八郎　44

『高度国防国家の確立と外交転換の座談会』 内田繁隆／齋藤忠／杉森孝次郎／野村重臣／平野学 50
銃眼
愛婦と国婦との問題 神近市子
戦争と文学 杉山平助
産報運動の文化性 菊川忠雄
ラヂオと大衆娯楽 上泉秀信
現地報告 新聞使命の一飛躍（国内の新聞） 津久井龍雄 75 67 63 59 55
新体制の中間報告
新体制と大東亜共栄圏 田中幸利
農村と文化―部落指導者の現地報告 松田甚次郎 84 76
今後の対ソ外交に就いて―建川新大使へ冀望す 関根郡平 89 82
時局直言 川村和嘉治
米穀政策の転換 岡田宗司
蘭印交渉の意義とその展望 庄子勇之助 122 116 107 102 100 90
支那側の東亜連盟論 宮本武之輔 125 119 115 106 101 98
山西雑感 在南京
現地報告
住宅問題の産物（関東の財界） 松本榮 126
新体制関西版（関西の財界） 本山住吉 128 127
支那人の「民心」―上海を中心として 小岩井浄 134 127 126
現地報告 在上海
支那新聞の全体主義（大陸の新聞） 田中幸利 138 135
残夢―パリ日記抄 小松清 143 135
『新体制に処する小売商人』座談会 川西伊平次／佐藤四郎／土屋好重／中島一十郎／広瀬与兵衛／松田幸治郎／茂呂嘉一郎／山崎真一／三浦一 144 160
社会随想
青年と娯楽 権田保之助
帰農者の問題 鈴木舜一
或る支那将校の話 火野葦平 林髞 182 170 165 162
思想工作と科学工作―日支文化提携具体策 四
現地報告 出版文化の再編成（文化） 樺俊雄 187 182
昨今統制団体秘聞―海運界の巻 由比佐介 188 187
東亜細亜への全面的再猛襲―成吉思汗全伝第七 大場弥平／鈴木朱雀画 194 208
編輯後記 208 207
『現地報告』三八 八巻一二号 一九四〇年一一月一〇日発行
表紙
扉絵 島崎鶏二 3
日独伊三国同盟の世界史的意義 金内良輔 4
大陸画文集 包頭 中村研一 12 13
三国同盟と太平洋の戦勢 匝瑳胤次 14 13
現地報告 日本の前進と危機の加重―政界 木原通雄 23
大政翼賛会に直言する座談会 尾崎陞／坂山利忠／川崎堅雄／穂積七郎／津久井龍雄 24
銃眼
職域奉公に努めよ 喜多壮一郎 27
大政翼賛運動中核人への希望 齋藤瀏 29 27
日本人的精神を灼熱せしめよ 本領信治郎 31
大政翼賛運動への希望 平野義太郎 33 31
時局直言 野崎龍七 48 33
経済閣僚会議と転失業対策 50
現地報告
転業問題の核心―関東の財界 松本榮
新体制とユニフォーム―関西の財界 本山住吉
中南米に於ける英米・独伊の角逐 濱田久米夫 59 58
「満洲国の当面する重要問題」座談会 稲葉秀三／小泉吉雄／塩見友之助／平貞蔵／津久井信也 60 59 58
銃眼 大政翼賛運動への希望四つ 木村禧八郎 70 75
南方現地報告
ビルマ・ルートの解剖 奥村勝蔵
ビルマ・ルート走破記 駱伝華
大陸画文集 牛を屠る 鶴田吾郎 94 100 105 104
訪満旅日記抄―満洲紀行 その二 本誌特派員 長谷健 99 104 105 106 108 116 117 122 125 92 75
大陸画文集 開封 中村研一
南方現地報告 皇軍進駐と仏印の将来 田澤丈夫 118 117
南支の重要性に就て 笠谷馨 123 125
躍進する北鮮の電気化学工業 南支軍報道部
南方現地報告 蘭印原始人と日本人達 金子鷹之助 126 133
南鮮雑観 宮武辰夫 134 140
日本精神と儒教道徳―日支文化提携具体策 五 三好達治 141 147
現代日本の文化・風俗 武内義雄 150 154
現地報告 高明 155 159
表面的新体制―国内の新聞
三国同盟と支那紙―大陸の新聞 名越時春 160 161
南方現地報告 岐路に起つタイ 田中幸利 161 166
現地報告 文芸と政治―文化 松永彦雄 162 167
学生と新体制 樺俊雄 167
知識的勤労奉仕の提唱 慶大 松島佑効 168 172
新しき学園の構想 早大 高安鬼一 172 174
起ち上る姿勢 宮丸太郎 174 179
大陸画文集 支那馬 帝大 鶴田吾郎 179 178 174 172
社会随想 室伏高信
青年と新体制 丸山幹治 180 184
遊民を一掃せよ
麦と共に―南山東の剿滅戦より徐州へ 陸軍中尉 武田謙二／黒田千吉郎画 186 194
中央アジア・南露の征服 成吉思汗全伝・完結篇 大場弥平／鈴木朱雀画 196 208
編輯後記 207 208
『現地報告』三九 八巻一三号 一九四〇年一二月一〇日発行
表紙（独逸の誇る潜水艦）
扉絵（冬の蒙彊人） 鶴田吾郎 3
新経済生活の創建 太田正孝 4
国民経済組織化の意義 高宮晋 11 12
時局直言 齋藤忠 19 21
シンガポール論 遠藤一郎 20 22
独ソ会談と欧洲新情勢―ソ連の外交展開を中心に 木原通雄 29 30
現地報告
事変新段階と日本の政治―政界 37
日満支経済建設の問題―東亜経済懇談会に際して 石浜知行 37
現地報告
財界人の人生観―関東の財界 松本榮 38
統制行過ぎ―関西の財界 本山住吉 46 47
転失業問題の性格 大河内一男 48
日本と支那と仲よくするには―日支文化提携具体策 六 武者小路実篤 56
新体制下の学生に与ふ―希望に生きる生活について 永田清 59 60
大陸画文集 焼いも売 小穴隆一 64 65
議会局と選挙法への批判 木原通雄 66
『経済革新の方策と実践』座談会 柴田敬／井家上専／石田良三郎／漆葉見龍／川端道一／上村鎮威／国島泰次郎／田中和一郎／坪田光蔵／西田重雄 72
銃眼
統裁と多数決 川崎堅雄 75
文化部の任務 上泉秀信 79
二つの道 上司小剣 83
現地報告
新聞記者の意識的反逆―国内の新聞 名越時春 102
ヒトラーの外交攻勢―大陸の新聞 田中幸利 103
昨今の北京を観て―雑感苦言三つ三つ 在支 小早川秋声 104
社会随想
新体制と帰還兵士 日比野士朗 108
医薬と医療 小泉丹 112
在米邦人二世達の立場 国友忠夫 115
英国敗走兵の手記 121
大陸画文集 十三陵騎驢行 ニューヨーク・タイムス特派員 ウオルター・カー 122
海外同胞の現地報告 柚木久太郎 128
在伯邦人の経済状態
蘭印の実相 畑中仙次郎 130
現地報告 早川成治 139
晋東山岳戦記 樺俊雄 140 144
海外同胞の現地報告 瀬木整 145 146
大陸画文集 文化の移入―文化 157
日本人の米国移住 163
海外同胞の現地報告 藤賀与一 164
大陸画文集 靴直し 小穴隆一 166
海外同胞の現地報告
英領ボルネオの話 酒井東万作 168
昨今統制団体秘聞―繊維工業の巻 由比佐介 175
増産北海道の横顔（＊絵と文） 岸丈夫／加藤悦郎 176
治安維持会の青年達 柴田賢次郎 181
熊沢蕃山―日本経世家列伝 野村兼太郎 184 195
編輯後記 196 208
『現地報告』四〇 九巻一号 一九四〇年一二月一五日発行
表紙
扉絵 杉山吉良 3
一億弗対蒋借款と上海 猪熊弦一郎 4
法幣と一輪車経済 杉村広蔵 6
大陸画文集 十三陵 在上海 鬼頭仁三郎 9
土族授産と転失業 堀江保蔵 16
現地報告 ルーマア爆砕―関西財界 本山住吉 25
翼賛会一歩前へ！ 井澤弘 26

地方組織への批判　羽生三七　33
時局直言　資本と経営の分離—産業新体制案の中心課題　木村孫八郎　33
資本と経営の分離—産業新体制案の中心課題　木村孫八郎　38
新経済体制の立案者たち—企画院書議室の官僚群　菱山辰一　40
「日華條約の次に来るもの」座談会　秋山邦雄／伊藤好道／木村峻八郎／田中惣五郎／平貞蔵　46
銃眼　54
臣道の実践　三宅鹿之助　57
翼賛する心　角田藤三郎　63
構造と機能　浦本政三郎　67
民心把握の技術　豊島与志雄　71
日本人歓迎のボルネオ　西寛治　76
言論封鎖のソ連近況　森正蔵　80
現地報告「新秩序反抗者」の問題—政界　57
帰朝報告　伯林も空襲下にある！　木原通雄　85
現地報告　財界人の暗中模索—関東財界　長嶺仲二　85
電力飢饉と日本発送電—統制団体秘聞・電力の巻　松本榮　86
アメリカ圏の新動向を語る　93
堀内謙介／桑島主計／芦田均　94
大陸画文　大同回顧　宮田重雄　102
社会随想　116
病中芒々録　由比佐介　117
国語の純化運動　藤田徳太郎　118
現地報告　新聞社の勤皇佐幕—国内新聞　伊丹万作　123
人間西園寺の一面—近衛公指導の裏に潜むもの　名越時春　126
東方会議前後　木村毅　127
特輯　工場へ娯楽を持ちこむ　工場娯楽への夢　山浦貫一　128
現地報告　国語政策に就て—文化　鈴木舜一　129
特輯　工場へ娯楽を持ちこむ　樺俊雄　130
勤労者娯楽の今昔—工場ルポルタージュ・関東の巻　138
与へられた娯楽への疑問—工場ルポルタージュ・関西の巻　徳永直　144
工員はどんな娯楽を求めてゐるか（資料集）　松本休　145
—工場労務者娯楽調査報告　146
土肥原将軍　155
野戦の実相　159
現地報告　日華條約を繞つて—大陸新聞　成瀬関次　167
上杉鷹山—日本経世家列伝・二　棟田博　178
編輯後記　田中幸利　180
野村兼太郎　190
191
194
206
208

『現地報告』四一　九巻二号　一九四一年二月一五日発行

表紙　杉山吉良　3
扉絵　小早川篤四郎　3
特輯・日米危機に備へよ！　4
アメリカ国民に与ふるの書—著名記者への手紙　鈴木文史朗　4
銃後国民に与ふる十誡　アンドレ・モーロア　13
特輯・日米危機に備へよ！　13
開戦準備の米国数学界　高須鶴三郎　14

現地報告　財界人の悩み—関東財界　松本榮　19
特輯・日米危機に備へよ！　19
米国海軍を正視せよ　伊藤正徳　20
米国の戦争製造業者　木村隆作　34
時局直言　42
特輯・日米危機に備へよ！　43
アメリカは参戦するか　伊藤七司　44
現地報告　国際危機と議会—政界　木原通雄　55
責任ある政治を求む！　津久井龍雄　56
現地報告　新聞と輿論—国内新聞　名越時春　60
翼賛会の政治力とは何ぞや　向井潤吉　61
日本法理と支那法理　矢部周　62
満洲経済への再編成　瀧川政次郎　64
満洲経済への建言　佐藤祐次　76
満洲経済の現地検討　鈴木茂三郎　63
大陸画文　静かな前線　江崎孝坪　67
現地踏査　農村の娯楽と生活文化を語る座談会　78
宮原誠一／松尾要治／本誌特派記者三名　83
銃眼　94
公益観念の公定　95
民族の総意を　住田正一　96
議員の時局認識　上田広　114
戦時議会の覚悟　鹿島守之助　183
農村議員諸君へ　木暮武太夫　195
現地報告　西陣異変—関西財界　小野武夫　208
農業団体改編をめぐる攻防戦—統制団体秘聞　本山住吉　206
台湾の皇民化運動　由比佐介　207
現地報告　日米関係への批判—大陸新聞　樺俊雄　209
ベタン政府の悩み　田中幸利　183
ヴィシーに世相を拾ふ　重徳泗水　195
大陸画文　井上勇　208
中支近情　安東収一　206
社会随想　207
科学と道義精神　和達清夫　209
今日の耳目　宮本百合子　183
現地報告　学生組織の再編成—文化　樺俊雄　195
中国人交遊記　嘉治隆一　208
新らしき宣撫工作　伊地知進　206
フランスを滅ぼした二百家族　207
アンドレ・シモーヌ　209
兵馬行　澤村三木男　183
荏戸太華—日本経世家列伝・三　野村兼太郎　195
編輯後記　208

『現地報告』四二　九巻三号　一九四一年三月一五日発行

表紙　吉川晋　3
目次カット（広東所見）　向井潤吉　4
扉絵　馬淵逸雄　8
東洋人の銃口を外に向けよ　藤本四八　16
占領地の通貨工作—ドイツの経験を中心として　中山伊知郎　10
対支文化工作の重点　杉村広蔵　18
時局直言　24
支那に於ける東亜連盟運動の展開　植田捷雄　26
一頁評論　31
議会後の近衛内閣—政界　木原通雄　32
大阪経済二筋道—関西財界　本山住吉　33
バルカンの新動向—独ソの提携は永続するか　遠藤一郎　34
アメリカといふ国　高柳賢三　40
白人濠洲の苦悶　金内良輔　43
印度独立運動の足踏み—何故大規模な反英騒乱が起きないのか　寺田顕男　41
一頁評論　32
翼賛会と新聞社—国内新聞　名越時春　34
大衆娯楽の問題—文化　樺俊雄　39
新帰朝・駐在武官座談会　33
わが国土防空はこれでよいのか!!
大阪中佐／西原少佐／山本少佐／吉武中佐　45
大陸画文　大陸の表情　鈴木栄二郎　39
満洲の女性たち　在上海　小泉菊枝　37
上海のジアーナリズム　西村捨也　45
大陸画文　支那の色彩　広本季与丸　39
バーミユダ島報告　磯部佑治　37
「技術者の観たアメリカ」座談会　45
石川嘉夫／石田啓次郎／隈部一雄／新山春雄／畠村易／備藤三郎／村山大二郎／矢崎為一／山本峰雄　108
銃眼　106
人民団体組織綱領　石濱知行　96
青年よ何処へ行く　笠間杲雄　88
新体制思想の理念化　今日出海　86
戦略家マハン少将—米国海軍は如何に戦ふか？　石丸藤太　68
社会随想　近頃会心のこと　67
在満教育者を讃ふ　石原純　66
人口政策の発足　高田保馬　62
芸人の組長その他　岡本一平　54
ノモンハン戦記「闘魂」　佐佐木信綱　40
五徳の夢の実現　今村明恒　34
国家主義の勃興　土方成美　33
ガムラン将軍の悲劇　ペルチナツクス　32
一頁評論　松本榮　112
銃後思想の統一—関東財界　近藤栄蔵　107
アメリカ再発見　松崎啓次郎　105
阿南一等兵の話　野村兼太郎　95
新井白石—日本経世家列伝・四　87
編輯後記　85

『現地報告』四三　九巻四号　一九四一年四月一〇日発行

表紙（仏印の博物館）　小早川篤四郎　3
扉絵　大蔵公望　4
欧州大戦激化とソ連の動向　新井宿一　11
一頁評論　弱肉強食の戒心—関東財界　大西齋　12
事変処理に躍進あれ！　富塚清　20
専門家に頼る心を去れ—日常生活と科学心の問題　26
時局直言　交川有　28
技術公開の具体策—公益優先とは単なるお題目ではない—　清水多嘉示　34
大陸画文　洞庭湖畔　井出季和太　36
民族より見た南洋華僑　43

大陸画文　大同石仏の構想　真道黎明　44
「日本の外交攻勢」座談会　今井登志喜／大志摩藤四郎／加田哲二／亀井貫一郎／清瀬一郎／桑島主計　46
銃眼　百卅五億貯蓄　金原賢之助　51
父兄の入学難　伊藤永之介　57
恋愛の道徳　清水幾太郎　63
大陸画文　昔の戦場　鈴木保徳　68
共栄圏現地報告
二大成果を確認せよ　在北京　城所英一　69
一現地人の要望　在北京　大平進一　70
上海経済の考へ方　在上海　杉村広蔵　73
東京会談成立と仏印の新情勢
在ハノイ　横田高明　80
仏印・絵行脚（＊絵と文）　伊原宇三郎　83
一頁評論　松岡外相の渡欧—政界　木原通雄　84
バルカン危局を現地に観る—ギリシアとトルコは何うなるか　大屋久寿雄　89
蘭印との経済提携の意義　牧悦三　90
米国善隣政策の内幕—メキシコに伸びるアメリカの魔手　海野稔　97
ドイツ潜水艦の作戦　106
駐日独逸国大使館附海軍武官・海軍少将
バウル・ヴェンネケル　98
一頁評論　新聞の興行化—国内新聞　名越時春　105
参戦一歩前のアメリカ経済界　戸田豊太郎　109
危機下の在米邦人近情　田中軍吉　110
満洲国の隣組—寔城子隣組長の報告　在新京　山田清三郎　114
社会随想　時事に觸れて想ふ　120
翼賛会の改組　川村和嘉治　121
農民の声　齋藤瀏　122
民族的発奮について　暉峻義等　132
一頁評論　文化と統制主義—文化　樺俊雄　134
脱出するブレーメン号
ブレーメン号船長　アドルフ・アーレンス　143
南支駐留記　中里三平　149
二宮尊徳—日本経世家列伝・五　野村兼太郎　153
編輯後記　154
『現地報告』四四　九巻五号　一九四一年五月一〇日発行
表紙（蘇州寒山寺）　横田喜三郎　159
扉絵　新井宿一　162
日ソ中立條約の意義　山浦貫一　163
一頁評論　新産業合理化運動—関東財界　本山住吉　166
松岡外相に呈する書　岡本清一　169
政治行動への独白—革新を語る青年に寄せて　171
一頁評論　小倉と大阪財界—関西財界　173
時局直言　178
我が国の人口問題—民族国策としての人口政策に就て　古屋芳雄　183
大陸画文　南京にて　安田半圃　186
世界の発火点・帰朝報告書　189
印度に見るソ連の南下政策　脇山康之助　194
「支那語教育の革新を語る」座談会　一戸務／魚返善雄／奥野信太郎／竹田復／宮原民平　199
大陸画文　街の労働者　無縁寺心澄　204
世界の発火点・帰朝報告書　206
イーデン外交の決算　209
敗戦責任の所在　南井慶二　214
安南人の悲愁（＊文と絵）　井上勇　216
世界の発火点・帰朝報告書　蘭印の印象　安東収一　219
ソ連に病む　三浦伊八郎　223
一頁評論　戦争と海外通信網—国内新聞　森正蔵　229
世界の発火点・帰朝報告書　名越時春　234
アメリカ知識人の動き　239
独伊の近東・北阿作戦　坂部重義　244
中支見聞　横山正幸　249
抗戦支那の教育　藤森成吉　251
重慶と英米の宣伝合作　西村捨也　254
現地報告　南京の空気について　在上海　石原円弥　256
世相を描く　在南京　石川信雄　259
一頁評論　東亜文化の確立—文化　大森洪太　264
南方民族問題　樺俊雄　269
インドネシア民族運動—東亜共栄圏の立場から　坂本徳松　273
安南人は起ち上るか—過去の光栄を想起せよ　永田安吉　276
仏印絵行脚・拾遺（＊文と絵）　伊原宇三郎　277
一頁評論　外交の一進展—政界　木原通雄　281
五人の囚人閣下—幽閉された敗戦仏国首脳者の生活
アンス・アルベ　283
金持アメリカへ逃ぐ　谷口晴彦　286
大原幽学—日本経世家列伝・六　野村兼太郎　289
編輯後記　294
『現地報告』四五　九巻六号　一九四一年六月一〇日発行
表紙（南京街頭所見）　安田半圃　298
扉絵　高田保馬　302
長期国策を確立せよ　本山住吉　303
一頁評論　仏印と大阪経済—関西財界　大島義清　304
石油戦と科学の力—独逸より帰りて　長岡克暁　306
対支政策の不動　交川有　308
時局直言　311
科学技術新体制の確立　314
アメリカの参戦近し!!　重徳泗水　317
独仏提携と大西洋の危局　名越時春　320
一頁評論　新聞の性格—新聞　323
近東に戦果飛ぶ!!帰朝報告　樋口正治　324
近東戦を繞る各国の覘ひ　327
アメリカの参戦近し!!　330
アメリカの航空界の現状　橋口義男　331
一頁評論　財界人覚悟の秋—関東財界　新井宿一　334
近東に戦果飛ぶ!!帰朝報告　独逸の対回教徒政策　小林哲夫　336
現代戦艦論　依田昌二　339
大陸画文　支那の陶磁　小早川秋声　341
「中国青年は何を考へてゐるか」座談会　趙慕儒／章建之／劉蕃風／華漢光／周雨人／高漢／倪弘毅／花香育／上沼健吉／生江健次　344
銃眼　言葉と行ひ　東浦庄治　346
急と不急　茅野蕭々　349
国語の普及　久松潜一　350
一頁評論　本多大使の上京—政界　山内藤介　353
アメリカの参戦近し!!　356
アメリカ孤立派陣営の人々　伊藤七司　358
史話の中の石油　原随園　359
一頁評論　科学する心—文化　樺俊雄　362
半島旅信　富安風生　365
濠洲戦時調　井上昇三　366
大陸画文　姑娘と女優　三宅鳳白　369
増産運動視察報告
米産国　越後の農村—農民は身体一杯働いてゐる！　池島信平　372
進軍する地底の戦士—時局下の足尾銅山を観る　鈴木俊秀　375
私の人物評論　377
郷古潔君　住田正一　378
木内キヤウ女史　長谷健　379
本多熊太郎氏　下中弥三郎　380
現地に見る泰・仏印宣伝戦　寺島正　383
アメリカの参戦近し!!　386
海外特派員の感傷—あめりか・めきしこ雑記　389
変貌する学園—新体制下大学ルポルタージュ・早大の巻　在縫育　中野五郎　390
アメリカの参戦近し!!　千束民雄　393
米国よ参戦する勿れ　396
ノーマン・トーマス　397
二人の戦争製造業者—モルガン翁とカンタベリ大僧正の大陰謀　細川清　399
李家集分遣隊　邑楽慎一　402
田沼意次—日本経世家列伝・七　野村兼太郎　405
編輯後記　408
『現地報告』四六　九巻七号　一九四一年七月一〇日発行
目次カット（南京所見）　南京報道部提供　411
扉絵　藤田嗣治　414
一頁評論　官民協力体制—関西財界　本山住吉　416
生活新体制と消費者組織　留岡清男　419
時局直言　422
蘭印の現状維持勢力の検討　425
蘭印に於ける英米の勢力　山田文雄　428
和蘭植民政策と民族問題　板垣与一　429
一頁評論　独逸の財界と日本の財界—関東財界　新井宿一　432
全面和平に就き中日両国民に訴ふ　石川三四郎　434
上海の新性格　温宗堯　436
法諺から見た支那国民性　瀧川政次郎　438
戦時イタリアの諸相　齋藤祐蔵　440
独軍占領下のパリ　関口俊吾　443

独米戦時経済の比較　円城寺次郎
フイリッピンに於ける米国に実力　池上博
地中海作戦の帰趨　戸苅隆始
満鮮の表情　津久井龍雄
エヂプトの回教大学　小林哲夫
一頁評論　短評欄の自壊―新聞　名越時春
リンドバーク大佐の人気―続・外国特派員の感傷
勤労文化の現状　中野五郎
北部仏印を往く（＊文と絵）　鈴木舜一
一頁評論　宗教と植民政策―文化　安東収一
近頃の農村　樺俊雄
霜害記　毛利久夫
土を守る　三代田耕
よりぐるま　高柳儀一
霜　高枝明
肥料のことなど　柴野ひろ
北海の老傷痍軍人　日比野士朗
ノモンハン血戦記（＊文と絵）　小川真吉
松平定信―日本経世家列伝・八　野村兼太郎
編輯後記　208 196 178 172 169 167 165 164 162 161 156 148 140 139 132 126 117 112 104

＊目次によれば次の三つの文章があるが、架蔵本、近代文学館所蔵本、国会図書館所蔵本ともに45～51頁までを欠くため不明。扉に「改訂」と印有。

独ソ開戦と全世界の動揺　竹尾弐
独ソ戦の戦略的考察　大場弥平
一頁評論　官僚政治は続く―政界　山内藤介　50 46 38
208 196 178 172 169 167 165 164 162 161 160 154 146 139 138 130 125 116 110

『現地報告』四七　九巻八号　一九四一年八月一〇日発行

扉絵　裕伊之助
国防国家への経済の即応　田邊忠男
転換期とは何ぞや　平貞蔵　1 2 11 17 19 23 27
時局直言　河野密
近衛内閣の再出発　松原二郎
豊田外相論　24 20 18 12 2 1
「財政金融新体制と国民生活」座談会
太田正孝／木村禧八郎／工藤昭四郎／迫水久常／窪井義道／エドガア・スノウ
欧洲新秩序の将来
故村瀬卓爾大尉の日記　山内藤介
一頁評論　政治力再結集の問題―政界　61 52 46 41 28
超非常時の反省と覚悟　富塚清
敢然として立ち向へ
祖国のために　宮本武之輔
安きに馴れざれ（＊短歌）　齋藤瀏
超非常時の反省と覚悟　支那への関心　小泉丹
一頁評論　財政金融新体制と財界―関西財界　66 66 64 62
体験から観た都市防空　新井宿一
「ウラル以東」の経済力―ウラル・クズバス工業地帯　磯部佑治　70 69
ソ連民族問題の成否　和田俊夫
有村俊雄　82 76
86 81 75 69 68 66 66 64 60 51 45 40

一頁評論　琵琶湖の経済価値―関西財界　本山住吉
「独ソ戦の帰趨と世界の動向」座談会
大鷹正次郎／金内良輔／茂森唯士／平貞蔵／富士辰馬／前原光雄　88　87
銃眼
中学の英語廃止論　吹田順助
酔つぱらひ　宮澤俊義
東大寺の大仏　石田四郎
経済長期戦に備へよ　武村忠雄
戦争とロシア人気質　米川正夫
時局の世界地理　95 99 103 105 108
アイスランド物語　浅井治平
楽天地ウクライナ　布利秋　116 120 123 124 127
変つた北京　在北京　佐藤俊子
前進する清郷工作　嶋信正　128 134 135
一頁評論　名越時春　136 142 144 152 153
新聞社の明暗―新聞　在南京　猪野喜三郎
宜昌昨今　平野義太郎
フィリッピン印象記　樺俊雄
一頁評論　出版文化の方向―文化　小松清　154 161 162
仏印・タイより還りて　伊地知進
蘭印暦見　小川忠恵　170 172 172
白衣記　真船豊
序　野村兼太郎　185 173 186
佐藤信淵―日本経世家列伝・九
編輯後記　200 199

『現地報告』四八　九巻九号　一九四一年九月一〇日発行

表紙（南方に厳然たるわが歩哨）　伊原宇三郎　1 1
扉絵　鈴木文史朗
日・仏印経済提携の将来　金子鷹之助　2 7
英米共同宣言の背後を衝く　武内辰治
米極東政策の発火点　宮田光雄　8 14 21 29 22 30 31 42 43
対日包囲陣と国民的決意　幣原坦
敵性アメリカ縦横談　木村禧八郎
時局直言　44 61
南方の史的回想
一頁評論「助長」の愚―関東財界
対日包囲陣と国民的決意
「対日包囲陣と日本の決意」座談会
加田哲二／澤田謙／富永謙吾／松永寿雄／馬淵逸雄
銃眼
防空施設　高野六郎
英米共同宣言　日高只一　51 47
刮目すべきタイ国とその周辺　石川昌彦
泰の若き指導者達　伊地知進
泰といふ国　井澤弘
一頁評論　読売報知の合流―新聞　77 68 62
刮目すべきタイ国とその周辺　牧悦三
英領マレーへの認識　齋藤博厚
ビルマの近情　樺俊雄　78 82 89 90 94
一頁評論　学園の戦時体制―文化　小磯良平
戦争と画家の問題　小宮賢一
家庭防空戦闘法　鳥山喜一
支那的性格の一面―「老子」の思想に関連して

宣撫演劇隊　在南京　石川信雄
巡廻映画班　桑原勝次
巨大なる建設―躍進満洲国現地報告　在上海　間宮茂輔
中支第一線を描く（＊文と絵）　佐藤敬
統帥から見た独ソ戦　安藤英夫
欧亜『最終列車』に乗りて　下條雄三
一頁評論　凍結令の波紋―関西財界　岩井良太郎
移動劇団を見て　川村和嘉治
大西郷と安南の女将―越南独立運動綺譚　田中祐一
妙峰山掃蕩記　大岩誠
水野忠邦―日本経世家列伝・十　枝法
編輯後記　野村兼太郎
200 184 176 170 163 158 157 144 139 132 124 116 106

『現地報告』四九　九巻一〇号　一九四一年一〇月一〇日発行

表紙（独逸防空陣の活躍）　宮本三郎　1
扉絵
シンガポール論―南方の所謂「適性基地」の研究
一頁評論　女性産業動員―関西財界　伊藤正徳
我が臨戦体制の進展　岩井良太郎
時局直言　太田正孝　2 13 22 14 23 31
欧米列強の戦時財政　井藤半弥
一頁評論　新聞社の苦悶―新聞　井澤弘
発砲宣言の次に来るもの　恒川眞
モスクワ会議と米国　依田昌二
商船護送と大西洋艦隊　下條雄三
伊太利の対米輿論　38 35 32
「アメリカ臨戦態勢の検討」座談会
鮎澤巌／石井信太郎／円城寺次郎／木下半治／齋藤惣一　44
銃眼
野球に学べ　大村一蔵
心の敵　栗原美能留
パナマ運河を遮断されて　清川澄男
一頁評論　怒涛内に響かず―政界　山内藤介
仏印共同防衛から共同建設へ　在ハノイ　横田高明
仏印タイ、所見　田中勝俊
蘭印追放記　飛島定城
一頁評論　研究機関の整備―文化　樺俊雄
近東援蘇ルート危し　杉村広蔵
資産凍結と上海経済　在上海　J・P・エヴアンス
重慶の防空壕　吉植庄亮
農民に祈る　島木健作
軍人援護施設見学記　金井潤治
半転業の人たち　澤村三木男
修水河畔―或る日の輜重隊　田中丘隅
田中丘隅―日本経世家列伝・十一　野村兼太郎
編輯後記　144 142 131 125 121 115 109 105 100 95 94 87 81 73 72 55 51

『現地報告』五〇　九巻一一号　一九四一年一一月一〇日発行

表紙　杉山吉良
扉絵　川島理一郎
米国壮年期に達す　高柳賢三
2 1
9 1 144 142 131 125 121 115 109 105 100 95 94 87 81 73 72 55 51

明朗不動の政治を確立せよ　中野正剛
独逸防空陣を視察して　田邊平学
一頁評論　戦時外交と輿論―政界　山内藤介
東條内閣の新課題　清瀬一郎
東條内閣に三事を要望す　金子鷹之助
日米関係の最後の段階　齋藤瀏
寧ろ讃へむ！　鹿島守之助
日米国交の最終段階　稲原勝治
日本の進路　松前重義
時の観念　菊池八郎
東條大将論　10
「決戦態勢下の経済」座談会　岡田菊三郎／菱沼勇／竹沼可吉／船田中／本郷寿次　36
銃眼　中山伊知郎
現下の学生生活の問題　鶴見祐輔　45
学生生活の問題　気賀健三　51
現下の学生の使命　58
アメリカの外交攻勢　木下半治　62
アメリカの描く世界新秩序　河合俊三　66
欧羅巴をどうするのか　北村豊治　70
重慶を引きずる力　74
ドル外交の南米制覇　76
一頁評論　75
統制会『申合せ』と財界―関東財界　木村禧八郎　74
住友倆を作る―関西財界　岩井良太郎
凍結後のヒリツピン報告　中屋健弐
ドイツ東部作戦の焦点―新聞の独ソ戦況をどの角度で見るべきか　大島謙　82
北支の治強工作　在北京本紙特派員　86
清郷工作の実績を見る　牧野義男　88
日蘭印交渉史話の一齣―死骸の使者　松平健　93
北洋今昔譚　南京　幸田成友　94
一頁評論　祥瑞専一　99
東條英教将軍―新首相の厳父　井澤弘　100
一頁評論　宗教と政治―文化　木村毅　108
戦盲兵の手記　樺俊雄　116
水戸光圀―日本経世家列伝・十二　水谷明　117
編輯後記　野村兼太郎　118　123　124　132　144

『現地報告』五一　九巻一二号　一九四一年一二月七日発行

表紙　杉山吉良　1
扉絵　野間仁根　1
対支政策への誠実　長与善郎　2
日米最終事態への決意　11
日米交渉論　蠟山政道　12
上海より見た日米危局　在上海　杉村広蔵　15
一頁評論　近代戦争に就て―軍事　大島謙　16
この頃思ふことゞも　21
産業人の身構へ　杉山平助　22
一頁評論　藤山愛一郎　26
賀屋蔵相と岸商相―経済官庁　菱山辰一　28
岩井良太郎　29
自由主義の終焉―関西財界　28
引揚邦人の語るアメリカ戦時態勢　有馬純義／海老名一雄／笠井重治／篠原勝朗／曾布川征夫　29
30

銃眼　木村鋭市
日米交渉と威信　山室誠　35
アメリカ当局へ　39
戦火のモスクワ報告記―建川大使健在なり　溝部寿六　46
泰・仏印国境走破記　八木彩霞　49
北京の都城精神　奥野信太郎　53
北京の日本語教育　在北京　菊池租　54
厚生列車に乗つて　本誌特派員　62
増税と国民生活　牧野義男　68
戦時議会を内部から見る　高橋亀吉／河野密　73
一頁評論　船田中　74
新聞小説無用論―ジヤーナリズム　菊井雄二　87
軍服を着る学生　気賀健三　88
一頁評論　93
百七十億貯蓄と国民生活―国民生活　94
主婦も工場へ動員する　金子良吉　96
一頁評論　支那人種の剽窃癖―支那学　宮尾武男　97
ルーズヴェルトを操るユダヤ人達　魚返善雄　98
ダフ・クーパーと共に飛ぶ―アメリカの対日前哨線報告　日下部清人　103
クレアー・ブース　104
正服武力抗戦の終熄―支那事変第五年を送る　110
山西最後のイギリス宣教師　中島鉦三　112
始皇帝―支那名君名臣伝の一　小川忠愿　119
編輯後記　植村清二　120　123　124　133　134　144

『現地報告』五二　一〇巻一号　一九四二年一月七日発行

表紙（山本連合艦隊司令長官）　笹岡了一　1
扉絵　1
大東亜戦争の意義　中谷武世　2
亜細亜民族解放戦としての大東亜戦争の意義　9
一頁評論　旧刊紹介―支那学　魚返善雄　9
大東亜戦争の意義　山田文雄　10
大東亜共栄圏の経済的基礎　村川堅固　15
大東亜戦争の世界史的意義　16
提督山本・此人にして此事あり　桜井忠温　19
陸戦の労を讃ふ　大森洪太　23
この歓喜　24
海軍志願兵　28
三つの放送　島木健作　30
アメリカ戦時経済の弱点　小林秀雄　31
一頁評論　世界戦争の展開―軍事　加田哲二　32
アメリカ国防計画の失敗　米国上院議員　大島謙　33
ハリイ・F・バード　34
一頁評論　41
大東亜戦、商都の表情　岩井良太郎　42
長期戦を戦ひ抜くために・座談会　大熊信行／権田保之助／重政誠之／宮塚清／那須皓　49
一頁評論　戦果と政治力―経済官庁　菱山辰一　50
銃眼　溝上銈　55
神の加護　河野密　59
大きな転回　林髞　59
戦争と電波管制―何故ラヂオが聞えなくなつたか　75
一頁評論　75

燈管下の犯罪取締―戦時下ドイツに於ける犯罪と其の取締法　清原邦一　76
印度兵の話　内藤英雄　82
仏印の感傷　平塚広雄　90
一頁評論　89
国家的新聞の発足―ジヤーナリズム　菊井雄二　97
南方民族は日本に何を期待するか―仏印、泰、馬来を視察して　須山卓　98
米の誤算した日本空軍の実力―彼等は、斯く見た　北村小松　104
一頁評論　桃太郎観念を戒む―国民生活　金子良吉　111
菅沼貞風―南進の青年志士　平野義太郎　112
虹の日の租界進駐―十二月八日の上海　在上海　多田裕計　118
諸葛孔明―支那名君名臣伝の二　植村清二　134
編輯後記　144

『現地報告』五三　一〇巻二号　一九四二年二月七日発行

表紙（南方戦線を征くわが鉄牛）　福田貂太郎　1
扉絵　1
南方資源戦争と日本　高橋亀吉　2
南方資源と国内統制経済の整備　8
一頁評論　金持の楽しみ―関西財界　岩井良太郎　9
アメリカの社会不安―その労働者・農民問題の重大性　加田哲二　10
一頁評論　支那学と本―支那学　魚返善雄　16
南方資源戦争と日本　17
南方資源の開発・第一座談会　川本邦雄／神原泰／熊田琅四郎／野間海造／渡邊源一郎　18
南方資源戦争と日本　38
輸送力増強の問題・第二座談会　後藤隆吉／久門邦忠／住田正一／林彙邇／安田丈助／若林清作　54
一頁評論　55
「新輪型陣」に就て―軍事　大島謙　56
都会人も満洲開拓で成功した　杉野忠夫　61
明けゆく南方　西貢　伊地知進　68
一頁評論　新聞「共販」の混乱―ジヤーナリズム　69
マニラ突入記―比島南下部隊に従軍して　マニラ　田上旺作　69
ウエーキ島征略記　菊井雄二　76
南方華僑への理解　78
新嘉坡英当局の誤算　切符制と買溜め―国民生活　82
ビルマの黎明　金子良吉　88
生活革新への途―全体と個との意識的合一化　89
地方民の決意を聴く特派記者座談会　本誌記者　車谷弘／生江健次／牧野義男／池島信平　90
銃眼　蒲池清　94
大東亜戦と世界史　木村禧八郎　99
戦争判断の常識論的誤謬　100
北辺物語―アラスカ点描　藤井甚太郎　103
苦力と女（＊小説）　高木寿一　109
忽必烈汗―支那名君名臣伝の三　長井寿助／小川真吉画　111
編輯後記　祥瑞専一　115
植村清二　116

『現地報告』五四　一〇巻三号　一九四二年三月七日発行
表紙（落下傘兵）
扉絵（大東亜海）
時務言　2 1
「大東亜戦争新段階に入る」座談会　伊東敏／金子鷹之助／齋藤忠／野村重臣／古橋中佐／堀田中佐／満田巌　高島佐一郎　31 6
大東亜経済建設の構想
シンガポール陥落の感激
魂勝つ人によりて　大串兎代夫　46 44
青年アジアの捷利　齋藤瀏　47 45
大東亜の戦勝を貫くもの　43 30
新しき日本経済建設のために—経済時評　西谷弥兵衛　48
誌上協力会議　南方開発方策一二　56
時局解説　南方調査機関の統合　永田正夫　57
神話と科学—思想時評　松島忠　59
新嘉坡陥落に関する外国の反響　58
シンガポール陥落の感激　荒木時次　67 60
五世紀の悪縁を断つ　齋藤晌　69 66
昭南島の事ども　井澤弘　70
草　新議会とは何ぞや—政治時評　新田マス　71 73
頌歌　花見達二　74 72
大東亜天地清けし（＊短歌）
シンガポール陥落す（＊短歌）　吉植庄亮　82
シンガポール陥落の感激　谷馨　83
二重橋に御英姿を拝す　松崎不二男　84
印度瞥見　小林辨吉　85
時局解説　濠州産業の構造的弱点　横山大助　86
蘭印進出の指針　根本榮次　92
時局解説　大東亜建設審議会　島田晋作　94
誌上協力会議　皇軍への感謝　日下清　99
南方軍の四将星　100
軍政顧問の横顔　百本佐次郎　101
原稿募集　102
マニラ籠城記—マニラ日本人小学校調導の手記　本橋正虎　103
北邊物語—アリユウシヤン物語　祥瑞専一　107
誌上協力会議　読書への迷信　下島連　108
新嘉坡陥落までの戦術概観　中井良太郎　109
編輯後記　116 110 116 118 123 131 132 134 144

『現地報告』五五　一〇巻四号　一九四二年四月七日発行
表紙（陸戦隊の活躍）
扉絵（濠州資源図）
時務言　1 2 6
翼賛選挙の真諦—国民に激す　日本世紀社同人
翼賛選挙のために—時局随想　5 15
「地盤」とは何ぞ　八並鎌一　16
新人の条件　穂積七郎　17 19
「大東亜建設者の資格」座談会　蘆田英祥／今村忠助／大田兎代夫／神田孝一／古屋芳雄／杉浦健一／瀬川次郎
時局解説　南方諸宗教の実態　鏡島寛之　20 41
建設時評　挙国体制確立の真義—経済時評　42 43
誌上協力会議　西谷弥兵衛　44
氏神の復活
建設時評　平和に対する覚え書—政界時評　東京市　建部一　53
誌上協力会議　花見達二　54
大東亜貯金の提唱
建設時評　指導者の保身術—思想時評　愛知県　隅木宮雄　61
独逸言論界より大東亜戦評を拾ふ　齋藤晌　62
誌上協力会議　荒木時次　65 66
出て貰ひたい人　文藝春秋社　68
原稿募集　千葉県　齋藤長右衛門　69
大東亜戦争勃発後の支那事変　「現地報告」編輯部　69
時局解説　苦悶する重慶　山崎靖純　70
戦争経済と国民生活—生活建設への道　田中幸利　78 80
嗚呼！特別攻撃隊　永田清　79
軍神を仰ぎて　岡不可止　77
感激にひれ伏して　齋藤史　88
時局解説　米国の北方進攻路とアラスカ　竹尾弐　90
誌上協力会議　93
出て貰ひたい人　福岡県　山本良美　91
出て貰ひたい人　栃木県　旭城生　94
印度に与ふ第二公開状　野口米次郎　95
英帝国の印度支配とその危機　小竹豊治　96
その日のビブン首相—日泰外交史の一挿話　101 109
時局解説　在盤谷　岩田冷鉄　100
大東亜戦記　欧洲戦線の春季展開　山口泰二　95
落下傘部隊急襲記　陸軍報道班員映画班　荒木秀三郎　94
国境よりカウカレイまで—ビルマ進軍記　陸軍報道班員　若林政夫　110 113 114
編輯後記　115 116 120 122 127 128

『現地報告』五六　一〇巻五号　一九四二年五月七日発行
表紙（我が精鋭部隊の進撃）
扉絵（印度資源図）
時務言　1 2 6
マレー血戦全記　マレー方面参謀談　34
マレー戦日誌抄　33
大東亜総力戦の転換　5
時局解説　寺田弥吉　38
印度の政治的要求　夏野虎雄　39
印度の資源的価値　春山四朗　47
建設時評　49
東亜建設と新しき日本—経済時評　西谷弥兵衛　51
時局解説　48
印度の民族と宗教　前島信次　50
建設時評　世界新情勢と政治力—政治時評　花見達二　52
時局解説　62
独ソ春季戦の展開　森正蔵　65
フランスの政変を繞つて　小川恒　66
問題の国トルコ　戸川英胤　64
建設時評　大学論—思想時評　齋藤晌　74
大東亜戦争と北支—北支通信　瀬川次郎　76 75 77 78 80 84
新議員への注文　桜井忠温　83
人間的な努力を　丸山義二　79
活私奉公　吉田三郎　89
第一義の道　93
サナペンの一日—ビルマ宣撫日記　陸軍報道班員　倉島竹二郎　91
北辺の安定—北満通信　安藤英夫　96
北辺物語—アラスカの資源　祥瑞専一　102
誌上協力会議　108
女子徴用と母の問題　東京市　佐藤俊二　115
進展する労務管理　警視庁労務官　鈴木舜一　107
王安石　植村清二　101
編輯後記　116 117 95 93 90 128 127

『現地報告』五七　一〇巻六号　一九四二年六月七日発行
表紙（工兵隊の協力下に進撃する銀輪部隊）
扉絵（満洲国資源図）
時務言　1 2
蘭印攻略戦全記　○○中佐談　6
大本営派遣陸軍幕僚
建設時評—思想戦特輯　27
思想戦の根本綱領—思想時評　5
思想戦と経済建設—経済時評　1
日本的武の顕現—政治時評　128 127
梅の花　齋藤晌　28
文化建設に活躍する作家—軍報道班員座談会　西谷弥兵衛　34
海野十三／大林清／木村毅　41
時局随想　マダガスカル島のこと　花見達二　35
ブキテマに戦ふ写真班—軍報道班員対談会　藤村信雄　42
影山正雄／光墨弘　高橋安　48
落下傘兵の心理—徳永中尉談を読んで　49
時局随想　淡路円治郎　54
南方随想　極楽島ニューギニア　小林喬一　56
時局随想　清水泉圏の諸民族　小山栄三　69
ビルマ戦記　濠洲の動物　神谷伊三郎　71
ビルマ戦記　前線報告　ビルマの草—スワ部落攻略戦記　陸軍報道班員　小田嶽夫　84
ビルマ戦記　前線通信　99
マンダレー入城　陸軍報道班員　高見順　94
バタアン戦記—ジヤングル戦線の性格　陸軍報道班員　柴田賢次郎　101
編輯後記　102 111 112 119 121 128

『現地報告』五八　一〇巻七号　一九四二年七月七日発行
表紙（〇〇基地の陸の荒鷲）
扉絵（北太平洋図）
時務言　1 2
皇道戦争観の闡明対談会—支那事変から大東亜戦争へ　中井良太郎／齋藤忠　6
五年前のその頃—七月七日を迎へて　桜井忠温　18
支那事変五周年を迎ふ—建設時評　齋藤晌　19
支那事変の思想的背景—思想時評　24
尊皇攘夷と支那事変—政治時評　花見達二　29
世界維新と支那事変—経済時評　西谷弥兵衛　30 36 37 41

英連邦の脆弱点—時局解説　伊東敬
洪牙利で見た欧洲戦乱　徳永康元
伊太利から帰る　桜井三郎
印度の危機と英国の苦悶　蘆田英祥
堯舜の都と水と　加藤将之
無敵荒鷲の伝統　松村黄次郎　陸軍中佐
大東亜戦記
索敵必殺の陸鷲—我が在支陸軍航空部隊の活躍　支那派遣軍報道部陸軍中尉　鷹尾正
感状に輝く加藤部隊　大林清
北東太平洋—ベーリング海の性格　陸軍報道班員　野満隆治
独紙に見る日本作戦評　荒木時次
アレウト族と文化　林欽吾
濠洲に与ふ公開状　金内良輔
香港の文化建設を中心に　山口蓬春
大東亜戦記　前線通信
哨戒第一線—駆潜艇同乗記　海軍報道班員　桜田常久
緬支国境突破記　陸軍報道班員　柴田安兵衛
神武天皇—大東亜建設史譚（一）　山本誠
編輯後記　128 116 106 102 93 89 84 82 77 74 66 60 58 52 46 44 42

『現地報告』五九　一〇巻八号　一九四二年八月七日発行

表紙（雪原を往く）　井澤弘／寺田弥吉／満田巌
扉絵（南米資源図）　西谷弥兵衛
時務言　花見達二　2 1
『もののふの道』座談会—現実と思想の探求　29 20 6
戦争観照の経済学—経済時評　33 28 19
身近かな陥穽—政治時評　5 1
大東亜戦記　コタバルを訪ふ（＊絵と文）　陸軍報道班員　中村研一
カナダの対戦動向　伊東敬
世界を蔽ふ電波戦—時局解説　上野収蔵
大東亜戦と中南米の動き　中西重華
埃及といふ国　天城篤治
中国共産軍の現状　大井英雄
独逸言論界の支那事変評　荒木時次
満洲通信　128 127 114 105 101 92 88 83 81 76 73 65 59 57 50 45 43

『現地報告』六〇　一〇巻九号　一九四二年九月七日発行

表紙（豪州近海に敵を索む海軍勇士）　陸軍報道班員　平野零児
扉絵（コーカサス資源園）　花見達二
時務言　西谷弥兵衛
ビルマ征空記　野口米次郎
官界の新建設—政治時評　伊藤敬
中小資本の行く可き道—経済時評　蘆田英祥
第三公開状印度人に与ふ　関口俊吾
英国の印度政策を視る　小林雄一
印度の抗英闘争史　6 2 1
満支画信　62 58 52 46 38 32 27 31 26 5 1
ルーズヴェルトとその幕僚群
誌上協力会議
復帰せよ百姓魂　埼玉県　伊藤久男
南露から北コーカサスへ—五年前の遍歴行から　鈴木舜一
不屈の工兵魂—陸軍工兵学校を見学して　牧野義男
誌上協力会議　76 70 69 68 61 57 51 44 37 31 26 5 1
軍の偉大さ　長崎県　北岡康雄
日本人の耐暑力—体質と熱帯生活について　久野寧
日本人の耐寒力—北満の酷寒とその対策について　正路倫之助
南方旅日記の中より　本田正次
誌上協力会議　94 87 80 79 78 75 69
百姓と役人と政治家　北海道　土方正夫
前線現地報告　謎のシヤン高原を行く　高田和夫／大木榮一写真　99
北満通信　極寒地帯　日戸修一
遣唐使—大東亜建設史譚（二）　山本誠
編輯後記　128 118 106 100 98 97 94 87 86 79 128 127 116 105 99

『現地報告』六一　一〇巻一〇号　一九四二年一〇月七日発行

表紙（決死人柱となつて友軍を渡す！）　柳澤彦三郎
扉絵（敵空軍日本爆撃可能圏）　川端龍子
時務言　福湯豊　山本誠
「日本人の錬成」（塾精神を探る）座談会—鈴木重雄／神田孝一／廣田俊一／小禁沢静夫／宮下悦蔵／逢正　陸軍中佐
戦争と反省　秋山邦雄
建設時評　日本長期戦論—政治時評　花見達二
紙上協力会議　民間機甲訓練の急務　清野謙六郎
建設時評　戦力増強の諸問題—経済時評　西谷弥兵衛
鮮満紀行　本田信治郎
満洲の文化建設　金原省吾
戦ふドイツ　芳賀檀
スターリングラード攻略戦　原子林二郎
ル大統領の腹心ハリー・ホプキンスの全貌　一原有常
印度の動乱と回教徒　鏡島寛之
防人—大東亜建設史譚（一）　陸軍報道班員　稲垣武雄
編輯後記　106 104 128 120 116 115 105

『現地報告』六二　一〇巻一一号　一九四二年一一月七日発行

表紙（マスコットの猫と戯れる海鷲の勇士）　陸軍報道班員　高田一夫
時務言　望月衛
「尊農精神の昂揚」（塾精神を探る）座談会（個人名なし）　陸軍技師　辻村泰男
蒙古撃滅—大東亜建設史譚（四）　江副保郎
編輯後記　山本睦男　128 114 111 108 106 100 88 81
傷痍軍人の職業保護に就て　軍事保護院技師
新生ビルマの自覚　陸軍報道班員
ビルマ独立義勇軍　陸軍報道班員
操縦者の精神的適性—時局解説　陸軍技師
ボルネオ派遣学生現地報告　山本誠
スリヤン集団農民道場にて　望月衛
ブルナイ雑感　128 126 119 115 105

『現地報告』六三　一〇巻一二号　一九四二年一二月七日発行

表紙（増産戦士の奮闘）　杉山吉良
扉絵（大東亜戦争一年の戦果）　野村敏雄
詔書　1 2 4
時務言　8
大東亜戦争一周年を迎ふ　寺田弥吉
大東亜総力戦一ヶ年の検討　坂口三郎
「拓士魂の陶冶」（塾精神を探る）座談会—十一月二十日内原・満蒙開拓青少年義勇軍訓練所を訪ねて　今井文二／江坂弥太郎　大井英雄
燦たり日本兵法—戦術から見た大東亜戦争　18 30 36
ハワイ海戦よりソロモン海戦へ　戸崎徹
大東亜戦争一周年を迎ふ　41 35 29
日本精神と勝利の理論　坂口三郎
増産への決意を語る工員座談会—経営幹部への直言　48 42
理想と現実のヒズミ—増産への決意を語る」座談会速記録を読んで　58 47
南方戦線より帰る　128 118 115 110 106 104 92
大東亜戦記　北水を圧するもの　陸軍報道班員　北林透馬
編輯後記　128 126 117 114 109 105 103
南方人—大東亜建設史譚（一）　山本誠
防人—大東亜建設史譚（一）　128 126 119 115 105

『現地報告』六四　一〇巻一三号　一九四二年一三月七日発行

表紙（増産戦士の奮闘）　杉山吉良
扉絵（大東亜戦争一年の戦果）　野村敏雄
詔書　1 2 4
時務言　8
大東亜戦争一周年を迎ふ　寺田弥吉
大東亜総力戦一ヶ年の検討　坂口三郎
「拓士魂の陶冶」（塾精神を探る）座談会—十一月二十日内原・満蒙開拓青少年義勇軍訓練所を訪ねて　今井文二／江坂弥太郎　大井英雄
燦たり日本兵法—戦術から見た大東亜戦争　18 30 36
ハワイ海戦よりソロモン海戦へ　戸崎徹
大東亜戦争一周年を迎ふ　41 35 29
日本精神と勝利の理論　坂口三郎
増産への決意を語る工員座談会—経営幹部への直言　48 42
理想と現実のヒズミ—増産への決意を語る」座談会速記録を読んで　58 47

松除精神と海軍魂　鈴木舜一　64
「十二月八日」の記録　岡不可止　59
勝利の船団―十二月八日の思ひ出　川崎豊次郎　68
真珠湾の一撃―メキシコで聞いた十二月八日　久野茂男　72
行列解消のための具体策
配給組合を作ること　松前重義　77
モトがいけない　桜井忠温　78
二つの方法　藤田国之助　78
「行列券」の発行　成瀬関次　79
私の店ではかうしてゐる　斎藤義政　79
物はあるのだ　穂積七郎　78
お届けものを根絶せよ　榊原平八　80
隣組を活かせ　下村海南　80
新聞牛乳配達の示唆　島田晋作　81
地区別単位に　谷善二　81
英語・ビルマ語・日本語―建設戦と言葉について　草薙正典　82
十二月八日の感激（愛読者応募原稿）　7名　87
「十二月八日」の記録
戦ふ海員魂―輸送船団と日本海員　高田正夫　90
現地通信　クチンを見る　在ボルネオ戦線　山沢兵部　98
豊太閤の南進政策―大東亜建設史譚（六）　山本誠　102
世界戦争宣言!!　アドルフ・ヒトラー　108
編輯後記　128

『現地報告』六四　一一巻一号　一九四三年一月七日発行
表紙（雑貨屋の店先―新生比島セブ市風景）　藤本四八　1
目次カット（仏印のある港）　萩須高徳　1
扉絵（アフリカ資源地図）　野村敏雄　2
時務言　3
最大生産力への道―資本収益と人間の能力収益の性格　坂口三郎　4
野の民のこころ　吉村貞司　13
「必勝責任感の徹底」座談会　21
勤労報国隊員の日記　編輯部　22
大串兎代夫／畔蛟義等／中井良太郎／穂積七郎／松前重義
黒沢尻商業報国会勤労報国隊／鱒沢女子勤労報国隊／水沢商業報国会勤労報国隊
ドイツの銃後生活　佐藤アヤ　35
共栄圏の日本語　片山伝吉　36
ソロモン戦闘の解剖―海戦を主として　及川佐一　37
御親拝を拝して　西ヶ谷徹　38
変貌する中国の西北角―重慶の西北開発計画と西北ルート　浅野晃　39
陸軍報道班員
御親拝を拝して　田口利介　40
変貌する中国の西北角　黒川四郎　45
独ソ冬季戦の性格　三浦薫雄　55
戦ひ正に酣　原子林二郎　59
今次大戦とアフリカの地位―英国最後の拠点を衝く　桜井忠温　64
南方研究書の批判　伊東敬　69
椰子と兵隊（＊絵と文）　坂本徳松　76
栗原信　80

「建設途上のビルマ・ジャワ」鼎談会　89
北原武夫／倉島竹二郎／山本和夫／館脇操
亜寒帯　榊山潤　94
ラングーン日記　陸軍報道班員　中山富久　106
バタアン砲撃記　陸軍中尉　112
編輯後記　118
128

『現地報告』六五　一一巻二号　一九四三年一月七日発行
表紙（歓喜する新中国の子供たち―杭州）　牧田仁　1
目次カット（昭南島風景）　栗原信　1
扉絵（南太平洋地図）　2
時務言　3
日華提携の新展開　特輯一　4
陸軍省報道部長
神武と皇道　谷萩那華雄　6
中国参戦経済の齎すもの　瀧口義敏　7
戦ふ農村の姿　特輯二　11
日本的農の精神　杉野忠夫　12
「農村をめぐる維新運動」座談会　19
鈴木多門／小杉祐次郎／津野武衛／真島中太郎／富樫甚平／須貝隆二郎／今成拓三／熊木壱郎／石黒武夫／穂積七郎
日華提携の新展開　特輯一　20
中国知識人に与ふ　片岡鉄兵　33
戦ふ農村の姿　特輯二　34
帰郷した推進隊員の手記　丸山義二　37
わが村の足跡　土屋利保　38
日華提携の新展開　特輯一　45
新生中国の胎動　海野秀雄　50
チュニジア攻防戦―北阿戦局展望　久野茂男　52
日華提携の新展開　特輯一　57
中国青年の動向　大中臣信令　58
工場生活三ヶ年　黒岩勇　63
戦ふ農村の姿　特輯二　64
移動演劇隊と共に―農村娯楽は如何にあるべきか　小山内徹　67
本誌特派員
ペナンの回想　栗原信画　68
キナバルの民　堺誠一郎　71
編輯後記　72
96

『現地報告』六六　一一巻三号　一九四三年三月七日発行
表紙（トラクターを運転する開拓団員）　相澤敬一　77
目次カット　栗原信　83
扉絵（満洲主要開拓地分散図）　84
時務言　95
撃ちてし止まむ　96
ガ島作戦の新展開　2
大本営陸軍報道部陸軍中佐
太陽の倫理―心の系英・文化主義を撃滅すべし　佐々木克巳　1
うちてしやまむ―承詔必謹（＊短歌）　吉村貞司　4
満洲皇国農村の建設　安藤彦三郎　7
国本農家の創設と満洲開拓　杉野忠夫　8
母村より開拓地分村へ　13
富士見村経済更生主事
開拓者の精神　小林基視　14
富永良男　18
26
29

開拓地と開拓行政　日下部清人　30
「満洲の皇国農村の建設」座談会　35
久保佐土美／土屋大助／西垣喜代治／齋藤誠
開拓団短歌抄（＊短歌）　榊山潤　56
ある開拓医の手記　18名　57
満洲農業再編成と開拓問題―近刊を中心にして　日戸修一　64
平湯一仁　69
「北の護り」儼たり―関東軍大演習参加記　前田源一　70
満洲開拓前史（一）　75
青少年義勇軍の訓練　河原正男　76
満洲開拓前史（二）　81
満洲開拓団所見（＊絵と文）　高島祥光　81
満洲開拓前史（三）　82
東寧農業報国隊長報告書　平田通　86
編輯後記　88
96

『現地報告』六七　一一巻四号　一九四三年四月六日発行
表紙　藤本四八　1
目次カット　山口蓬春　2
扉絵　宮田重雄　3
時務言　4
生産責任感の昂揚―新しい企業理念の確立　住田正一　7
皇道産業の本義　鍋田偉太郎　8
徴用者錬成への反省　江頭佳造　12
超重点主義経済の人的基礎　竪山利忠　13
「労務管理の新方向」座談会　16
鈴木舜一／鶴島瑞夫／乗富丈夫／小田倉一
工場医の手記　小松雄吉　23
生産陣視察報告　24
生産増強の根底をなすもの　江原謙三　37
本誌編輯長
工場神社―日本軽金属工場を視て　浅野晃　44
生産陣視察報告　45
本誌記者
生産への努力　53
遅しき首途―転業者のための東部国民勤労訓練所を訪ねて　徳田雅彦　54
本誌記者
航空整備兵（＊絵と文）　柴野方彦　57
独ソ戦と米英の焦躁　山口蓬春　61
陸軍落下傘部隊―〇〇部隊見学記　原子林二郎　69
キナバルの民（続）　里村欣三　71
編輯後記　堺誠一郎　75
96
96

（一四）

Organization and Progressing of Media During Wartime in Japan

Total Contents of “GENCHI HOKOKU” Published by BUNGEISHUNJYUSHA (2)

KAKENO, Takeshi

キーワード：戦時期、メディア、現地報告、文藝春秋
Key words ：during wartime, media, genchi hokoku, bungeishunjyu